

第56回全日本教職員バドミントン選手権大会 派遣レフェリー報告

競技役員長 丸山 秀之

今回で56回を数え、一般、年齢別の他種目にわたり多くの参加者による全日本教職員大会が、大きなケガや事故もなく無事終了できました。開催県である福島県バドミントン協会、福島県教職員バドミントン連盟の皆様をはじめ、郡山市他、大会運営にご尽力いただいた方々に心よりお礼を申し上げます。福島県における開催は、2011年の東北大震災より今日までの地域住民の方々の復興にかける強い意志と行動の結果が結びついたものと考えます。また郡山市で開催されますのは昭和56年(1981年)の第20回大会以来37年ぶりということだそうですが、私も選手として参加させていただきましたことを懐かしく思いました。

さて今年の夏は梅雨明け後、天候不順が続き、九州北部の豪雨以後も各地で大雨、洪水の被害が聞かれました。また、気温も30度を越える真夏日が続く中で大会となりました。開会式、式後のレセプションには綿貫会長、銭谷専務理事の臨席をいただきました。会長は昨年のオリンピックの成績に結びついたジュニア層の指導者のトップを決める「選手権大会」とともに、情報交換を含めた「研修、研鑽の場」とあるという歴史のある大会の意義についても触れられました。専務理事が述べられていたこの大会後にイギリスで開催された世界選手権への抱負や期待が、その後奥原選手の子女子シングルス金メダル、その他男女ダブルスを含め計4個のメダル獲得という、素晴らしい結果へと結びついたことは喜ばしいことでした。

大会を振り返りますと、まず会場、施設面に関しては、メイン会場の郡山総合体育館のコート間の間隔、サブ会場の安積総合学習センターの空調、照度などについて、代表者会議で説明し会場ルールとして伝達し了承を得ました。競技が始まりますと、各コートサイドライン側の距離が狭く4人線審の際に支障が出ました。また団体戦の日は気温が上がりほぼ終日空調を使用しましたが、吹出し口の関係で風の影響を強く受けたコートも出ました。個人戦ではサブアリーナは放送が入りませんでしたが、選手のコールなどで配慮いただき大きな混乱はありませんでした。また、サブ会場も照度が足りない面はありましたが、換気、観客席など対応をいただきスムーズに試合を進行できました。

競技、審判関係では、私は5月末の資格審査認定委員講習会に参加させていただき、ルール等の再確認をする機会を得ていました。講習会の内容は第1種大会におけるステンシルマークの表示、個人戦の組合せ決定後のエントリー変更、棄権についての改訂の確認の他、競技規則の解釈についてインターバルの始まりの計測、ウェアの前面、背面の表示、プレーヤー、コーチの服装、マッチ中のプレーヤーのケガ、けいれんの対処などでしたが、本大会の審判会議や競技前の打合せでそれらの点について話をさせていただきました。競技初日の福島県の審判の方も含めた打合せでは点呼に手間取り、競技開始前のコート整備等に影響が出てしまいました。審判の割当て、審判用具の十分な確保などの点で、より十分な準備の必要性を感じました。また、派遣審判は連続して参加していただいた方も多く、審判技術の研修と親睦を深められていたようです。これまでの経緯、手当などの関係もあるでしょうが、できましたら監督や選手以外の方が担当された方が良いと考えました。他に申込時の各県の担当者の申込書の記載ミス、事務局の確認などで混乱が生じたことなど反省点であります。

最後になりますが、デビュティレフェリーの吉川氏、三本杉氏と綿密な連絡、協議をさせていただくとともに、組合せ会議や大会運営では理事長の橋本氏、事務局担当の高木氏や柏原氏にたいへんお世話になりました。大会がお盆の時期と重なったこと、役員の方々にとっては大会後も東北ブロックの国体予選を控えていたことがありながら、無事に終了できましたことは、何より地元の事務局をはじめ、多くの方々のお力の賜物です。あらためて、皆さまのご尽力に感謝の意を表します。